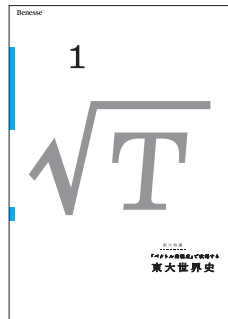


東大特講 \sqrt{T} 紹介

東大入試での合格ライン突破に向けた3か月(3回)完成集中講座。
東大入試ならではの問題の正しい「解法ルート」が身につく、今までになかった東大合格の確実がある。

開始月自由 3か月完成 1講座から

※教材のお届けは、毎月一回お届け(3か月)と3回一括お届け(一部例外あり)を選択できます。
詳しくは、HPのお申し込み内容をご確認ください。



「ベクトルの視点」で攻略する東大世界史

受講期間

3か月(3回)完成・毎月添削課題つき

受講費

15,000円(3回分一括払い・消費税込)

お届け教材

テキスト：B5判・約72ページ 3冊

添削課題

※各月(各回)テキスト1冊、添削課題1回をお届け。

制作チーム

浅野中・高等学校 宮坂武志先生

六甲学院 松浦明生先生

親和女子高等学校 黒河潤二先生 ほか

※所属は2006年2月現在

ベクトルの視点を使って、短時間で構想を「統合」できる高度な情報処理力を3か月で身につける。

出題テーマが多岐にわたり、論述の範囲・的を絞りにくいだけでなく、指定語句が他大学に比べて多く、整理しづらい東大世界史。本講座では、指定語句同士の因果関係・対比をベクトルの視点で整理することにより、短時間で指定語句を世界史の流れの中で整理し、論述の方向性を想定でき、世界史論述のルールに則って得点率の高い合格答案を作成することができる。

特長

●「ベクトルカード」で複雑な指定語句をグルーピング

論述の方向性をまどわすような語句もあり、ほかの大学の入試と比べて圧倒的に複雑な指定語句も、「ベクトルカード」ごとに分類することで、論述の方向性と範囲を想定することができる。

●ベクトルの視点で、論述の順序と「シークレットワード」を発見

指定語句同士の因果関係・対比をベクトルで示すことによって、論述の順序はもちろん、指定語句として与えられていない「シークレットワード」も発見できる。そのため、合格答案をよりスムーズに、説得力を持って構築できる。

●世界史論述の「作法」に沿った答案作成

論述で重要視される「書き出し」や「あいまいな語句を言い換えるテクニック」「文字数の過不足をフォローする論述テクニック」など、〈論述の作法〉に従って、グルーピングした語句群ごとにバランスのよい文字量で合格答案を作成できる。

「ベクトルの視点」で攻略する 東大世界史 見本

※ご紹介している内容・デザインは変更になる場合があります ※詳しいカリキュラムはHPでご案内しています

第4章

「ベクトルカード」から論述する

解釈

問題読解

例題2

東京大 2004年度 第2問 問2

キリスト教世界は8世紀から11世紀にかけて東西の教会に二分された。その2つの教会のいずれか一方と関わりの深いビザンツ帝国と神聖ローマ帝国とでは、皇帝と教会指導者との関係が大きく異なっている。11世紀後半を念頭において、その違いを4行(120字)以内で説明せよ。

キャストイング 出題テーマから連想される歴史用語は？

出題テーマ

皇帝と教会指導者との関係

神聖ローマ帝国

聖職叙任権

グレゴリウス7世

11世紀後半

皇帝教皇主義

破門

ビザンツ帝国

ギリシア正教会

インノケンティウス3世

叙任権闘争

カノッサの屈辱

ヴォルムス協約

ハインリヒ4世

「ベクトルの視点」で攻略する 東大世界史 見本

※ご紹介している内容・デザインは変更になる場合があります ※詳しいカリキュラムはHPでご案内しています

「ベクトルカード」をつくってみよう

問題読解 出題テーマを確認する

問われていることは「皇帝と教会指導者との関係」。ビザンツ帝国と神聖ローマ帝国それぞれの場合に分けて述べていけばよいと**解釈**できる。注意すべきことは「11世紀後半」と時代が限定されていること。この時期の両帝国の歴史の中で、教会との力関係がどう変化していったのかを考えてみよう。

キャストイング 仕分けしながら用語を書き出す

ビザンツ帝国と神聖ローマ帝国において、教会に関係することで思いつくことを並べてみると、まずビザンツ帝国では、ビザンツ皇帝がギリシア正教会の指導者（総主教）を支配する**皇帝教皇主義**が思い浮かぶだろう。続いて神聖ローマ帝国では、11世紀後半に教皇**グレゴリウス7世**と皇帝**ハインリヒ4世**のあいだで争われた**叙任権闘争**にふれないわけにはいかない。両者の対立は、**カノッサの屈辱**で教皇が一時的に優位にたったことまでは盛り込みたい。ただし12世紀の出来事となるヴォルムス協約や、13世紀に教皇権の最盛期を築いたインノケンティウス3世にまでふれる必要はない。

キーワード 制度の違いで述べるか、人物で述べるか

この論述では、設問条件に合う具体的な人物を挙げて歴史的イベントや事象を述べる方法と、制度面の違いを述べる方法の2通りが考えられる。制度面で述べるなら「神聖ローマ帝国」については**叙任権闘争**、「ビザンツ帝国」については**皇帝教皇主義**がキーワードである。

一方、キーワードとして**叙任権闘争**を連想した場合、そこから皇帝**ハインリヒ4世**の名や教皇**グレゴリウス7世**の名を思い浮かべる人もいるはずだ。さらに**カノッサの屈辱**で皇帝が教皇に謝罪したことまで連想できるであろう。そこでこれらの具体的な人名や事件名を入れてベクトルカードを**構築**した（次ページ）。解答例Bは、このキャストイングに基づいて作成したものである。ここで注意したいのはカノッサの屈辱という事件。破門を解いてもらうため皇帝が教皇に謝罪したことから、教皇が皇帝に勝利して両者の対立が終わったかのような印象をもっている人がいる。これ以後対立が解消されていれば「ビザンツ帝国」の場合とは反対に、教会指導者である教皇が皇帝よりも優位な立場にあったと対比できる。しかし、皇帝ハインリヒ4世はその後反撃に出てグレゴリウス7世を追放しているので、教皇の皇帝に対する勝利は一時的なものであった。であるから、解答例Aのように、皇帝と教皇の対立関係が続いているように述べてある答案の方がベターといえる。

